

異郷訪問譚の構造

(1)

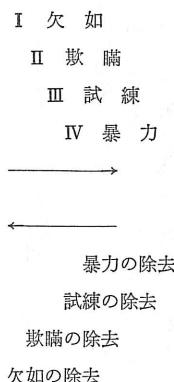
大林太良

一はじめに

説話の研究において、構造の研究は今日世界的に流行している。神話においては、レビューストロースの研究などがよく知られているが、昔話についても、何人かの学者が構造分析を試みている。

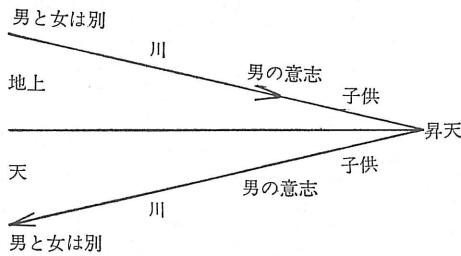
そのなかでことに興味深い試みは、ルーマニアのフォークロリスト、ミハイ・ポップのものであって、彼は一九六一年に兵士としての少女というルーマニアの昔話の構造分析を行なっている。それによれば、この昔話はいわばその前半と後半とが裏返しの関係になっている。つまり、前半で問題となつたいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開し、かつ同じテーマが問題になつていても、後半ではいわば前半の否定ないし対立というような形をとっている。たとえば、欠如というテーマが前半に出てくると、後半では欠如の除去という形になつていて。⁽²⁾早く言えば、ポップの方法は、構造分析における syntagmatic な見方と、paradigmatic な見方の双方を統合する試みと言えよう。つまり、第一図に見られるように、話の筋の展開に従つた分析である点では syntagmatic だといえるし、他方、総のコラムで、それぞれ別のテーマを問題にしている点では paradigmatic だと言えよう。⁽³⁾

私はこのポップの研究に触発されて、かつて奄美大島の天人女房



第一図 兵士としての少女の構造(ポップによる)

の昔話も、前半と後半とが裏返しの関係になつていていることを論じたことがある。⁽⁴⁾その後、いろいろ考えてみると、このように前半と後半が裏返しの関係になる構造は、なにもすべての昔話ないし説話に見られるものではないであろうが、異郷訪問譚にはかなり多く見られるのではないかと思うようになった。つまり、兵士としての少女



第二図 奄美大島の天人女房昔話の構造

も、奄美の天人女房も、ともに主人公は異郷を訪れる話である。しかし、その場合ともに主人公は別に故郷には帰つてこない。ところが、本格的な異郷訪問譚においては、主人公は故郷から異郷を訪れ、また故郷に帰つてくるという形式をとっている。この場合、話 자체が、往きの前半と帰りの後半からなっており、しかも運動の方向は往復逆であるから、前半と後半が裏返しになる可能性があると予想される。不完全な、別にもとの故郷にもどらない異郷訪問譚にもまして、本格的な異郷訪問譚はこのような構造をとり易いのではないだろうか？

このように考えて、私はいくつかの日本の例について検証してみ

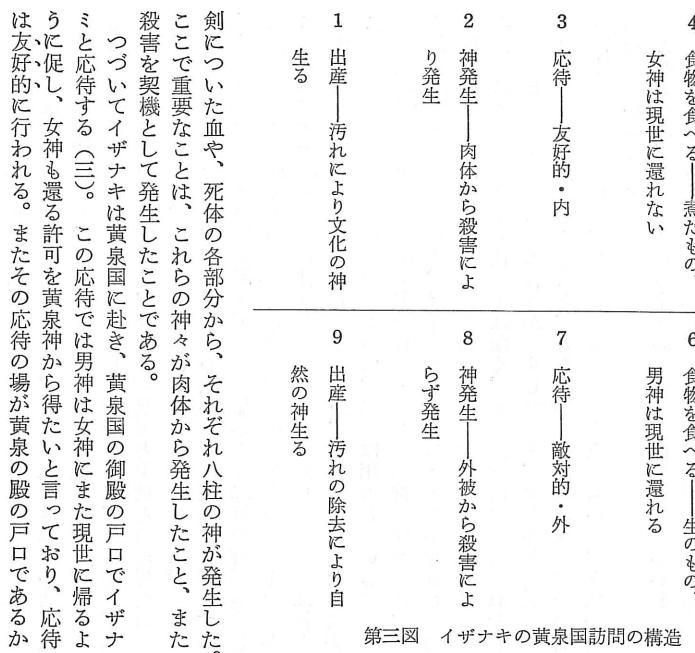
ることにした。その際、二つの点をあらかじめ指摘しておきたい。その一つは、ポップの研究した兵士としての少女、私の分析してみた天人女房の話とともに昔話であった。しかし、裏返しの構造は、本格的な異郷訪問譚である限りにおいては、昔話ばかりでなく、神話や伝説にも共通してみられる構造である点である。第二は、ポップが分析した例では、前半と同じテーマが後半にも出て来る場合、後半では前半の除去ないし否定という形をとつていた。しかし、同様のことが、この構造の説話のすべてについて言えるか否かは疑問である。後半に同じテーマが再びとり扱われる場合、必ずしも前半の否定や除去ないし対立とは限らない。しかし、何等かの形で同じテーマが前半と後半では意味や形を異にして現れることはだけは言える。

一 イザナキの黄泉国訪問

具体的な事例の第一として、『古事記』に記されたイザナキの黄泉国訪問神話をとり上げることにしよう。イザナキが亡妻イザナミのあとを追つて、黄泉国を訪問したが、つれもどすことができずに帰つて来た話である。

この話の発端（以下番号は図中の番号に対応）では出産が問題になつてゐる。つまり女神イザナミは火の神を生んだために病床に臥し、嘔吐や排泄物によつてカナヤマビコ。カナヤマビメ、ハニヤスピコ・ハニヤスピメ、ミツハノメ、ワクムスピを生んだ。ここで特徴的なことは、これらの神々が、嘔吐や排泄物、つまりいわば汚れをつくることによつて生まれたことと、これらの神々が鉱山、陶土、農耕など、いわば文化の神であることの一点である。

次に（二）夫神イザナキが火の神を剣で斬り殺したところ、その



第三図 イザナキの黄泉国訪問の構造

ら、黄泉国之内である点も注目される。

第四は、女神がこの応答中ににおいて、自分はすでに黄泉の国の竈で煮たものを食べたため、もう還れなくなつたと言つてゐることである。ここでは、食物を吃ることが問題となつてゐるが、その食物が煮た食物であること、食べた人物が女神であること、食べた結果として女神が現世にもどれなくなることの三点が重要である。

そしてこの次に転回点（五）がやつてくる。それは黄泉神と相談に行つた女神がなかなか帰つてこないのを待ち切れない男神が、櫛の歯に火をつけて見たところ、女神の身は腐敗して蛆がたかり、身体の各部に八柱の雷神が化生しているのを発見して驚愕したことである。このショックを転回点として話は前半から後半にうつり、逆の方向に進行を始める。なおここで四において煮た食物、六において生の食物が問題となつていてこの関連において、この五においては食物ではないが女神が腐敗していたことが語られているのを注意しておきたい。

さて、話は後半部にうつると、まず前半の四におけるのと同様に、後半の六においても食物を吃ることがテーマになつてゐる。黄泉国から逃走するイザナキを黄泉醜女が追いかけ、イザナキが轡を投げると葡萄の実となり、櫛を投げると筍となり、さらに桃の実も投げる。黄泉醜女がこれらの人間を食べている間に、イザナキは逃げのびて行くという（呪的逃走）モチーフである。ここで注目すべきことは、食物がいずれも生のものであること、食べた人物が、イザナミの代理人たる黄泉醜女であること、そして食べた結果として、男神が現世に帰れるようになつたことである。四において、煮た食物を女神が食べたため、女神は現世に帰れなくなつたとされてゐるのと、興味深い変化なし対照を示してゐる。

次にイザナキとイザナミは黄泉比良坂で応待する（七）。応待と

いう点では前半の三に対応するものの、ここではさきほどのような友好的な応待ではなく、二人が決定的に別れる絶妻の誓をするのであるから、敵対的な応待である。

そしてその場所も、三においては黄泉国の中であったのに對し、今度は黄泉国と現世との境界たる黄泉比良坂であるから、いわば黄泉国にとつて外なのである。

それからイザナキは、筑紫の日向の橘小門の阿波岐原で禊をするが、その際、まずこの神が脱ぎ棄てた衣服から十二柱の神が発生した（八）。これは前半の二と対応する神々の発生というテーマだが、

二においては神の肉体から神々が発生したのに對し、ここでは神の肉体ではなく外被（衣服）から発生した点、また二とは異なり殺害によらない仕方で発生した点において、二とは相違している。

最後に、イザナキが水中で左の目を洗うと太陽神アマテラス、右の目を洗うと月神ツクヨミ、鼻を洗うと嵐神スサノワが生れた（九）。これは前半の一に対応する神々の発生のテーマであるが、一においては前半の一に對応する仕方ではなく、まさに禊によって汚れを除去するという仕方において神々が発生したこと、また生れた神々が自然をあらわす神々であること、さらに神々の出現の場が、一のように陸上ではなくして、水中であることの三点において、九は一と相違しているのである。

このように、イザナキの黄泉国訪問譚は、前半と後半がいわば裏返しの構造をとっている。そして、ここでは紙数の関係で省略するが、『古事記』上巻におけるその他の異郷訪問譚、つまり、宇氣比・天岩屋神話、オホクニヌシの根の國訪問、出雲国護り、海幸山幸神話は、いずれもこのような構造をもつてゐるのである。しかし、このような構造をとる異郷訪問譚は『古事記』中巻にもみられるこ

とを次に論じよう。

三 神功征韓譚

話の発端（一）のテーマは家族であるが、そこにおいて、仲哀の死が語られている。筑紫の詞志比宮で天皇が琴を弾き神の託宣を乞うたが、始め天皇は神話を信ぜず、琴を押しのけ、次に不承不承弾いているうちに琴の音が絶え、火をともしてみると天皇は死んでい

た。話の発端（一）のテーマは家族であるが、そこにおいて、仲哀の死が語られている。筑紫の詞志比宮で天皇が琴を弾き神の託宣を乞うたが、始め天皇は神話を信ぜず、琴を押しのけ、次に不承不承弾いているうちに琴の音が絶え、火をともしてみると天皇は死んでいた。

4 新羅征服

話の発端（一）のテーマは家族であるが、そこにおいて、仲哀の死が語られている。筑紫の詞志比宮で天皇が琴を弾き神の託宣を乞うたが、始め天皇は神話を信ぜず、琴を押しのけ、次に不承不承弾いているうちに琴の音が絶え、火をともしてみると天皇は死んでいた。

3 動物——野生・海、動物自身

5 動物——家畜・陸・動物を飼う人間

6 神——指令する

7 家族——息子の誕生＝家族の形成・緩漫な生・石（鉱物・文化）

8 神——祀られる

第四図 神功征韓譚の構造

た。ここで大事なことは、仲哀の死は神功にとつては夫の死であり、したがつて家族の分解である。しかも、その死は突如として急速に訪れている。また死の契機として、天皇が琴、つまり植物でつくつた楽器（文化）を身体から遠ざけたことが語られているという三点である。

次に(一)アマテラスと墨江三神が神功皇后に征韓を命ずる。

つづいて、皇后の軍が新羅に向うとき、魚が軍船を背負つて海を渡つた(二)。これは動物をテーマとしているが、魚は宇宙領域としては海を表わすこと、また野生の動物であること、またこの魚による渡海は一回的な出来事であるという三点が重要である。

このあと新羅征服(四)があり、これを転回点として、話は逆転を始める。

つまり、新羅王は、これからは天皇の御馬^{ササ}となり、毎年貢納船を送ることを誓う(五)。ここでも三と同様に動物が問題となつてゐるが、三の魚の場合と比べると、五の馬は宇宙領域としては陸に属し、かつ野生ではなく家畜であること、そればかりなく、ここでは馬そのものではなく、その馬を飼う人間、馬甘が問題になつてゐる点において、三の魚の場合とは異つてゐる。またここでも渡海がとり上げられているが、この場合と異り、動物がこれを実行するのでない点、また一回的な渡海でなく、反復的な渡海である点が三の場合と異なつてゐる。

つづいて、神功は墨江の大神の荒御魂を国を守る神として鎮め祭つて、海を渡つて帰国した(六)。ここでは二と同様に神、ことに墨江三神がテーマになつてゐる。しかし、その取り上げ方が違う。つまり、二においては、神は神功に征韓を命令しているが、ここでは神功は神を祀るのであり、命令する神と祀られる神という様相の変化がある。

発端(一)に浦島子が海上で魚を得ようとしたが魚を得られずに、亀

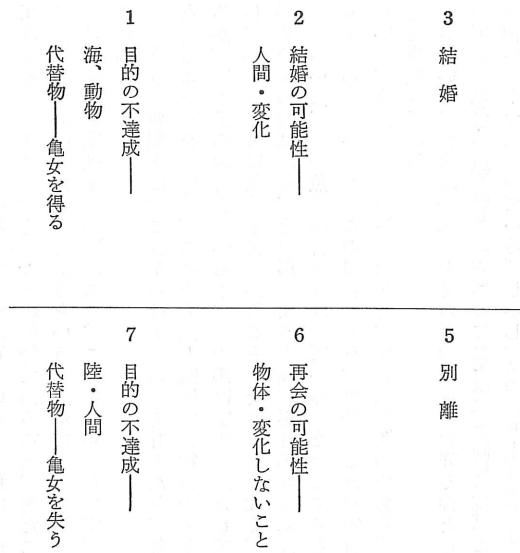
四 浦 島 子

最後に、再び家族が問題となつてゐる(七)。新羅平定の事業の終らないうちに、皇后には子供が生れそうになつた。そのため出産を延期するために、石を取つて御裳の腰につけ、新羅から筑紫國に渡つてから、応神天皇を出産した。一でも家族が問題となつてゐるが、そこでは仲哀の死という形をとつていたのに反し、七では皇子の出産という形であり、生と死の対照がある。さらに、一の夫の死は家族の分解を意味していたのに対し、七の応神の誕生は母子関係の発生、つまり家族の形成を物語る。また仲哀の死は急速な死であったのに対し、応神の誕生は延期された、したがつて緩慢な出生である。その上、仲哀の死に当つては、琴つまり植物を男の身体から離すことが一つの契機になつてゐるのに対し、応神の出生の場合は、石を女の身体に着けることが行なわれてゐる。しかも、琴は楽器であるから文化であるのに対し、石は自然である。

このように神功征韓譚においても、前半と後半が裏返しの関係にあり、かつ前半と後半のそれぞれ対応する項目においては、同じテーマがとり上げられていても、さまざまなる変化や対照が見られるのである。

ところで、このような構造の異郷訪問譚は『古事記』以外の古典にもみられる。次にその一例として、『丹後國風土記』逸文の浦島子の話を見ることにしよう。

ところが、この亀は舟の上で若い美女に変身した(一)。この動物



第五図 浦島子伝説の構造

である。
妻の嘆きにも拘らず、浦島子は帰途につくことになる(五)。これは三の結婚に対する別離である。

妻は別離に当り玉匣を取り、「君、終に賤妻あわせを遺れずして眷かみみ尋ねむとならば、堅く匣を握り、慎しみてな開き見給ひそ」と浦島子に言った(六)。この六は私の考えによると、二の亀が女に変身した項目と対応するものである。この二つが対応するというのは、些か奇異な印象を与えるかも知れないが、次の理由によっている。つまり、二においては、女への変身は結婚の可能性を意味していた。六においては、玉匣は、妻の言葉にあるように、開かなければ、再会できる、つまり再会の可能性を意味しているのである。ともに問題の男女が一緒になるれる可能性がテーマとなっているが、二においては結婚、六においては再会という相違がある。さらに二においては人間、六においては物体という点も異っている。そればかりでなく、二においては動物から人間への変身、つまり変化がこの結婚の可能性の条件となっていたのに反し、六においては、匣を開けないこと、つまり変化しないことが再会の可能性の条件となっているといふ点も相違点となつてゐる。

浦島子は故郷の筒川の村に帰つて來た。しかし、彼が独り蒼海上遊んでまた還り来らなくなつてから、すでに三百余歳を経ていた。したがつて彼は会いたいと思っていた人達に会うことはできなかつた。そればかりでなく、彼が玉匣を開けたところ、「芳しき蘭のどとき体かた、風と雲とに率いて蒼天に翻り飛びき」。浦島子は亀女との再会の可能性も失つてしまい、物語は悲劇的な結末を迎える(七)。ここでは、一において海で魚を得ようと思ったのに得られなかつたのに対し、陸上で会いたいと思った人間に会えなかつたことが対

応している。期待したものが得られなかつたというテーマにおいては共通しているが、海と陸上、動物と人間とという相違がある。さらににおいては、魚のかわりに浦島子は亀を得ている。ところが七においては、彼は会いたい故郷の人には会えなかつたばかりか、その代替物を得ることもなく、逆に亀女との再会の可能性も失つてしまふという相違がある。

この『丹後國風土記』逸文は華麗な漢文で書かれており、甚だ文飾が多い。しかし、それにも拘らず、異郷訪問譚として、裏返しの構造がこのように明瞭に認められるのである。

五 甲賀三郎

今まで私が取り上げて来た事例は、すべて古代文学のものであった。しかし、もっと後の時代の文学においても、異郷訪問譚にはこのような構造が見られる。その一例として、ここでは中世の『神道集』巻十の五十に記された甲賀三郎の話をとり上げることにしよう。周知のようにこの甲賀三郎の話は極めて複雑な内容をもつてゐる。もっと詳しく分析すれば、これから私が示すもの以外にも、いろいろ興味深い点が浮び上つて来ると予想されるが、ここでは、現時点において私が気づいた構造を描き出すのに止めた。

まず、近江甲賀郡の地頭・甲賀頭頼胤が年七十余のとき、その三人の息子に三界分治を命じたことが出ている(一)。つまり、太郎譲致には東山道八ヶ国、次郎譲任に北陸道七ヶ国、三郎譲方(たんぽう)に東海道十五ヶ国のそれぞれ惣追捕使を命じて、父は老衰して死んだ。ここで重要なことは、三分が問題となつてゐること、次に兄弟、したがつて同性間の分割が問題となつており、また三兄弟に与えられた

惣追捕使という職掌は警察的な職務であり、ひらく言えば、統治機能といつてよいことである。

三郎は大和の国守となり、春日神社に参拝の折、春日権頭の娘・春日娘と契つて、甲賀館にともなつて帰つた(二)。つまり、三郎と春日娘との結婚である。

次に三郎の地底遍歴が始まる(三)。つまり兄弟三人が伊吹山で狩をしたとき、春日娘がさらわれてしまい、三郎は全国に姫をさがし求め、ついに信州蓼科嶺の人穴の中で姫を発見して救い出すが、春日姫に横恋慕している兄次郎の奸計により、綱が切られてしまい、三郎は穴の外に出れなくなり、穴を東に進み、好賓国、草微国、草底国など七二の国をすぎて維縪国に至つた。この地底遍歴で重要なことは、兄の奸計がからまつてゐることである。

次に三郎に維縪国で国王の末娘維摩姫と結婚したが(四)、これが話の転回点となり、逆行が始まつて、つまり、三郎は維縪国で十三年間過したが、春日姫恋しさに日本国に向つて地底遍歴がまた始まる。この第二の地底遍歴(五)に出かけるとき、岳父・好美翁は鹿の生肝で作った餅一千枚を三郎に渡し、日本までの一千日、毎日一枚ずつ食べるようになされたほか、途中のさまざまの難所を克服する方法を教え、その手段を提供してくれた。つまり同じ地底遍歴というテーマではあるが、三においては兄の奸計がからんでいるのに反し、この五では岳父の援助がからんでいるのが大きな相違である。

そして三郎は信濃国浅間嶺に出たが、自身は蛇身に化していた。ある老僧の言に従つたまゝ人間にもどり、兵主神に導かれて三笠山に行つて春日姫と再会した(六)。つまり、二においては春日姫との結婚であるのに対し、この六においては再会である。

最後は二神分祀である(七)。つまり三郎はその後平城国に行つて



第六図 甲賀三郎譚の構造

対し、ここでは二分である。また一では兄弟、したがつて同性間の関係がとり上げられているが、七では夫婦、したがつて異性間の関係が問題になっている。また一では三界分治つまり統治が問題になっているのに反し、七では二神分祀、つまり祭祀がとり上げられているという相違がある。

六 おわりに

このように、異郷訪問譚は、『古事記』の昔から後世まで、少くとも『神道集』のころまで、一貫して前半と後半の裏返しという同じ構造をもっていることが明らかになった。恐らく、さらにそれ以後の時代の異郷訪問譚の多くにも、このような構造がみられることが予想されるが、その点、今後の研究に俟たねばならない。

もちろん私は以上のような異郷訪問譚に共通の構造をとり出すことをもって、異郷訪問譚研究のすべてであるとは毛頭思っていない。このようない分析によって、我われは例えれば諱訪縁起の孕む庵大な問題の一つを明らかにできるのに過ぎない。

しかし、このようない分析によって、物語のなかの個々のモチーフないし挿話が物語全体のなかでどのようない位置を占めているかを知ることができる。たとえば、諱訪縁起発端の三界分治も、このようない分析によつて始めてその深い意味や全体中に占める位置が理解されるのである。

私は小論において、日本文学から口承文學にもとづくと思われる異郷訪問譚の例をとり上げ、そこには共通の約束があることを論じた。もちろん、これは日本の異郷訪問譚のごく一部にしか過ぎない。日本文学史上の他の作品、また現在の昔話や伝説における異郷訪問

譚にも、同様な構造がみられるかどうか、また異郷訪問譚以外にも、どのような説話にこの構造がみられるか、さらにこののような構造をもたない異郷訪問譚は、このような構造をもつてゐるのか、の検討は今後の課題である。小論が多く研究者にこの問題への関心をよび起し、新たな研究への刺激として役立つたなれば、小論の目的は達せられたと言つてよい。

- (1) 本稿は一九七八年六月四日日本口承文藝學會第11回大会(第波大學)において特別講演したもの。
Mihai Popp, Metode noi în cercetarea structurii bas-
- (2) melor, in: Folclor Literar, I: 5-11, 1967 (底記 Neue Methoden zur Erforschung der Struktur der Märchen, in: Felix Karlinger (Hrsg.), Wege der Märchenforschung (Wege der Forschung, CCLV): 428-439, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1973)
- (3) ポップ、ボイニチ、最近の説話研究における syntagmatic な研究と paradigmatic な研究の対比とその論理構造について。
Evgeni Mel'činski, L'étude structurale et typologique du conte, in: Vladimir Propp, Morphologie du conte: 201-254, Éditions du Seuil, Paris 1970 を参照。
- (4) 大林太良『日本の神話』1回八—1回1頁 大月書店 一九七二年

● 日本口承文藝學會は、会則にも譚でありますように、日本および諸外国の口承文藝に関するものの調査、資料収集、研究を促進し、研究者間の交流をはかることを目的に設立されました。つきましては、この目的を達成するため、各県各市町村の口承文藝に関する調査報告、資料等を學會に「寄贈ください」。会員諸氏の「協力を願い致します。

● 会員の方々の口承文藝に関する原稿を募集いたしております。研究論文は四百字詰原稿用紙三十枚~五十枚、資料報告は三十枚以内で日本口承文藝學會機関誌編集委員会宛て送付ください。なお、掲載等につきましては編集委員会にてお問い合わせください。

(井井さやー だらやか)